

### 第3回 九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会議事要旨

日時：平成20年3月18日(金) 10:00～12:00

場所：福岡県福岡市博多区 博多都ホテル 3階 桐の間

委員名簿：別途添付

#### 1. 開 会

#### 2. 主催者あいさつ

#### 3. 委員長あいさつ

#### 4. 議 事

##### (1) 前回調査検討委員会での意見への対応

##### (2) 候補地抽出について

##### (3) 直接面接調査結果について

##### (4) 地域が抱える問題・課題について

##### (5) 地域の存続・再生のあり方について

##### (6) 閉会

小川委員長挨拶：

九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会には、新聞にも関連記事の連載が始まるなど、大きな関心が寄せられています。

このような情勢のなか、本委員会を記事にした報道機関の中で、小規模・高齢化などの課題を抱える集落を「限界集落」と表現するものがみられたため、読者から抗議の声が聞かれました。改めて本委員会では、「限界集落」といった表現は使用していません。

報告書作成等に関しては、課題を抱える地域の方々の感情に配慮し、表現に配慮しながら、まとめたいと考えております。

集落の高齢化・小規模化は、中山間部に立地する過疎地域だけではなく、都市部においても起きていることから、本調査では、これらの課題を抱える地域すべてを包括的に捉え、調査対象地としております。

##### (1) 前回調査検討委員会での意見への対応

##### (2) 候補地抽出について

##### (3) 直接面接調査結果について

事務局：資料説明。

#### 小川委員長：

集落の面接調査の結果では、対象地ごとに情報量が異なりますが、このあと、全対象地の調査結果の精査を高め、より良い物としたいと考えています。今回は、年1月に始まり、年度末までの限られた時間の中で作られたものです。ご理解いただきたい。

#### 山田委員

各々の集落の現状は良く分かったが、その集落において、どんなコンセプトを作るのが難しいのではないかと？

行政区や集落など自治体の最小単位で区切ってデータをまとめているが、周辺の集落との関わりがデータから消えてしまっていると思う。今後の課題として、検討いただきたい。

#### 小川委員長

今後の課題とします。

#### 北園委員

都市にないものを求めて、Iターンをはじめ、都市から人々が集落に来るが、都市の人にとっては、想像と異なる面もあるのでは？

自然豊かな景観を期待して訪れた都市の人が、風倒被害や皆伐後に植林せずに放置して荒廃するなどの森林の現状を目にしてギャップを感じることもあると思う。これは防災面でも問題である。

#### 小川委員長

都市の人と農村の人との感覚の違いは確かにあるように思います。また、農村の大きな問題となっている防災面について、調査では把握してありますが、今日の発表にはまとめておりません。今後、防災面についてまとめて報告書に掲載いたします。

#### 吉武委員

資料2では、調査対象地を抽出する段階では対象地が27つであったのが、実施の段階で18に減ったのはなぜ？

また、生活中心都市からの時間距離について考察してあるが、2地域居住については、福岡のような大都市には、大きな需要があることが考えられることから、大都市からの時間距離が重要になってくると思う。この場合、1、2時間なら2地域居住が出来そうだが、4、5時間もかかると現実的には居住したくても出来ない。

## 事務局

対象地が 27 から 18 になったのは、年度末の忙しい中で、また市町村は地方議会の時期も重なったことから、面接調査への対応が実施可能なところを優先したためです。

## 小川委員長

対象地は実現可能なものを優先するとともに、九州圏全域を網羅するように努めました。

## 矢田アドバイザー

小郡市が少しテーマから外れているように感じるが。

## 事務局

小郡市の近隣には高速のインターチェンジもあり交通の利便性は高い。面接調査を実施した対象地は市街化調整区域にあたり、30 年以上前に郊外型団地として県公社が分譲し、分譲開始から 3 年間位で入居者が押し寄せました。その結果、分譲地が 1 つの行政単位であることから、現在では高齢化だけ見ると突出しています。

## 小川委員長

今回の直接面接調査は、自治体からの登録のあったものが対象となっています。そのため、本来の委員会の目的とは異なる調査対象地があがることもあります。

## 山田委員

今回の調査で私も視察した南さつま市の集落は、山間であるものの、鹿児島市から車で 30 分の立地で、調査日が週末だったこともあり、集落外に転出した子世代が実家に遊びに来ていた。データ上は小規模・高齢化集落であっても、実際にはそれほど深刻な状況ではなかった。実際深刻な課題を抱える集落は、むしろ鹿児島市から山を越え、半島の反対側の海側の集落だと思われる。

### **(4) 地域が抱える問題・課題について**

### **(5) 地域の存続・再生のあり方について**

## 事務局

参考資料 4,5 の説明

### 矢田アドバイザー

直接面接調査には、いろんな集落の実情が回答に挙げられており、地域の存続・再生を考える上で大変興味深い。

しかし、資料 4 のような青年や壮年層が全くいない集落では、どう地域の存続・再生を担うのか？このような集落の高齢者は生きていくので精一杯。

外部に目を向けていく必要がある。中心集落や人口 5、6 万人の都市、そして、大学や専門学校が立地するさらに大きな都市との関係性を見出だしていく必要がある。現在、地域の存続・再生を担うことが現実的なのは、都市における団塊世代と高校生や大学生などの比較的時間に余裕のある人達である。また、学生は教育のカリキュラムにこれらを取り入れることで、担い手になり得る。

### 小川委員長

今回の調査結果は地域間の関係性を捉えたものとして報告する必要があります。

### 山田委員

私は、外部の人達に期待する矢田アドバイザーの意見とは異なります。資料 4、5 に関してみると、外から迎えることに重点が置かれているような気がします。3~5 軒でもいいから 3 千万円とか 1 千万円とかを儲けて自立できるような中山間地での取り組みがあってもいいのでないか？修学旅行に、また外国人向けにと、ツーリズムに関してだけでもいろんな方法はあると思う。その際、それぞれが真剣に取り組む、役割分担が必要。

### 北園委員

中山間地の実情として、現時点では生活できているから集落は存在しているのであって、高齢化がもっと進むと、住民が思うように体が動かずに生活できなくなると、どうなっていくのか？それを見据えた、集落の人々の今後のための社会実験案について考える方が、むしろ大事だと思う。

### 吉武委員

話は変わりますが、江戸時代の集落についてみると、小規模・高齢化の進む現在よりも、人口は少なかったのではないかと思う。このような歴史に学ぶことも、今後に活かせると思う。

また、棚田は昭和初期に作られたものが多く、その大部分が 100 年足らずの歴史しかない。もちろん、中にはもっと長い歴史をもつものもありますが…。少子・高齢化が進み、農地の担い手不足が問題視される中で、本当に守るべき伝統とは何かを考え直す必要もあるかもしれない。

### 小川委員長

周辺地域が非常に重要になると考えられます。中国地方では、小規模・高齢化が著しい集落が、まだまだ元気のある集落と手を組むことで、新しい団体を作っています。その上で、社会実験が考えられています。周辺地域とは、非常に定義が難しいものですが、例えば、中心集落や市街地などが挙げられます。

### 矢田アドバイザー

実際のところ、このまま行くと10年後の集落は見え見えだが、これまで、議論されてこなかった。それを回避するには、周辺地域との協働が必要不可欠。

### 山田委員

集落のエンディングをどうするか、が重要であると思う。

南九州の水産業は本当に大変だと思う。これは、南洋漁業が要因である。それに比較して、山の方は、バイオマスとか言われる点では、可能性があるのではないかと。しかし、バイオマスのような話が、今回の資料には一つも出てきていない。

先ほど、皆伐後の植林放棄は悪いと言われていたが、鹿児島本土から奄美までは、温暖な気候から、皆伐地を萌芽林として利用することで、お金のかからない、地域の種を用いた森づくりが推奨されている。

本委員会を九州らしさのあるものとしたい。全国の地方整備局が行う一律のやり方では面白くないと思う。

### 小川委員長

今日の報告は、年度末の限られた時間内でまとめられたものです。今後、委員の皆さんのご意見を取り入れ、社会実験の要素を考え直し、次年度につなげることを目的に、現段階のものとしてまとめることとします。また、地域が納得し、展望をもてるものとしたい。資料4.5については、選択肢を広げるということでご了承いただきたい。

## 6. 閉 会

(以上)